

察使に任命された人名、その解、その他の関連事項がとりまとめ付記され、それらの記載箇所も示されており、又、第二編の「帳」の項目には、漆帳・会救帳をはじめとして係帳に至るまでの計六十三種の帳の名前及びそれらの記載箇所が付記されているが如きである。尚、これら関連項目の個々の項目は、それぞれ独立項目としても検索できるようになっている。

三代格は一応類聚されていて使用に便ではあるが、そのために却つて他の類聚との重要な関連項目を見落しがちである。この点で、関連項目にまで留意した、三代格全巻を通じて索引が完成したことは、私達研究者にとつて裨益するところ極めて大きく、索引の作成に当つた方達と共にその完成を喜びたい。

最後に、種々の困難を克服して索引を完成された門脇氏をはじめとする日本史研究会史料研究部会の方達に敬意を表して、難雑な紹介の筆を擱きたい。

(A5判二二八頁 一九五九年六月 三一書房刊 定価八〇〇円) (泉谷康夫)

日本地名学研究所編

大和地名大辞典 続篇

戦後の農地改革、漢字仮名遣いの改革、自治庁の方針に基く強制的な町村合併など、まさに改革の連続である。町村合併は明治二十年の町村制実施以来の大変改で、その行政上の適否に就いては種々論議をみた処であるが、適正な批判については今後に残された問題であろう。その現象の一つとして、朝に消え、夕に生れる町村名の如何に多い事であろうか。歴史的古典的な地名が抹削され、忽然として想像も絶した町村名が群出してゐるのは奈良県下のみの現象ではなさそうである。

今度日本地名学研究所長中野文彦氏を中心として、昭和十七年春より大東亜戦争の苦難を超越して、孜々として進められていた奈良県下の小字名の蒐集は、市町村の台帳・地図等や現地採訪によつて、昭和二十七年に至り十五万を超える正編を刊行してその成果を学界に公表された。正編は奈良・大和高田の二市と生駒・磯城・高市・北葛城・南葛城・宇

智・吉野・宇陀・山辺・添上の十郡に分ち、夫々町村別に小字名を仮名并現行漢字にて表記し、地域別の地図を添付している。奈良県下に盛行をみている町村史研究には盛んに利用せられてゐる事も事実であり、その恩恵に接している研究も少くない。

正編が出版されてから七年目の昨年八月に至つて続編の刊行をみるに至つた。正編と同じ形のB五判・七五四頁の巨冊で、二頁四段組、正編が県下の公称地名を市郡村別に分類したのに対して、続編は正に索引的なもので、同一地名を五十音順に蒐集し、一見して同一・類似地名の検出を可能にしている。殊にかかゝるものにあつて必要な事は、地名の存在を示す要を得た表記法にある事であり、その点苦心の編輯のあとが認められる。一例を左に示す

ニシガイト 西垣内 奈・水門

生・平野・福畑

といった記載法で、西垣内という小字名は奈良市水門町に、又生駒郡平群村福畑の中に存在する事を示している。市郡の区別は二市・十郡の頭文字をゴ字で、町村・大字名は二字で九ボ活字で示され、一見してその存在を

学 界 消 息

史 学 研 究 会 関 係

史学研究会大会

は、中野文彦氏を中心とした地名学研究所員の一八ヶ年に及ぶ努力によつて集大成をみ、全国に例をみない地名大辞典が完成をみた。中野氏の炯眼はよく最近の改革を予想したとは想像し得ぬが、近來の農地改革・町村合併による地名の改廃を想起する時、本書が單に地理・歴史・國語・民俗の諸学徒の専有にきずものでなく、その利用活用の域を更に拡げるものであらう。(B5版 七五四頁 地図付 昭和三四年七月 京都伏見桃山 日本地名学研究所發行) (堀池 春峰)

恒例の十一月一日(日)二日(月)の兩日にわたつて開催した。第一日見学会は、約一二〇名の参加があり、バス二台を運んで予定の通り一休寺・酬恩庵・普賢寺・岩船寺・浄瑠璃寺のコースを京都博物館毛利久氏の懇切な解説のもとに巡回し、終了後南禅寺細川邸で懇親会を開催した。第二日總會及び大会は、楽友会館講義室で開催。總會は宮崎理事長の挨拶にはじまり、有光理事より会務・会計の報告があり、報告内容は満場一致で承認された。次に講演会は早稲田大学教授鈴木成高氏、京都大学教授藤岡謙二郎氏により、次のテーマで行なわれた。

戦後史学と歴史主義 鈴木 成高氏
地籍図にみる歴史地理学の課題 藤岡謙二郎氏

史学研究会十二月例会

十二月五日(土)午後一時於楽友会館
京大イラン・アフガニスタン・パキスタン

検出し得る。統篇のみによつても充分に活用し得る事はこれによつても充分に認められよう。その成果は何といつても一同小字名を徹底的に抽出表記する事に成功している事で、町村合併が進行している今日、一応昭和三十四年一月現在迄を対象として取扱われているが、カイト(垣)の如き小字名は実に千に及ぶ存在が確認せられ、「〇〇カイト」と称するもの等は垣内の項と五十音順に配列された項の中にも抽出する等、誠に良心的な編輯をなされている。

大和を研究するものにとつて、地名は重要な位置を占める場合が甚だ多い。昨今迄は地名の検出に「大和志」が重要な地位をしめていた事も事実であらうが、本書の成るに及んで、その研究は更に拡大進捗する事も充分に察せられる。唯望蜀の言を呈するならば三字以上の町村大字名が二字に省略表記されている点で、巻頭につけられた奈良県市町村大字(町)一覽表に一応目を通す不便があるからである。勿論この様な不便は中野氏が辛苦せられに努力に比すれば、その労をいとう方が間違ひであらう。

以上の様に正・統にわたる奈良県下の地名